

露子の浪華婦人会での活動―機関紙『婦人世界』を通して―

「石上露子を語る集い」会員

楫野政子

従来『明星』派のロマンチックな歌人として評価されてきた石上露子は、『明星』以外に『婦女新聞』やその他の媒体に美文や評論を残している。その一つ、浪華婦人会の機関誌『婦人世界』に彼女は編集者として関わり、婦人会活動にも寄与してきた。今回はあまり注目されてこなかった彼女の社会活動について、機関紙『婦人世界』を通して論じた。露子は、明治三十四年六月に創設された浪華婦人会に、同年九月二十歳の時に入会した。雑誌『婦人世界』の露子の作品には、婦人会活動を題材にしたものがいくつもある。この婦人会は慈善活動と雑誌発行を二大事業としたが、その慈善活動として設けた日露戦争下での出征軍人幼児保育所は、軍人家族の母親が就労しやすいように幼児を預かった。浪華婦人会の秋季茶話会は、明治三十七年十一月十九日、保管所のある鉄眼寺で行われたが、その様子を露子は「おきみちゃん」で作品化した（明治三十七年十二月第四三三号）。父親が出征し残された六歳の女の子

のあどけなくもいじらしい姿が描かれている。正面から戦争批判を記した翌月の「霜夜」とは違う形で、戦争に翻弄される庶民の姿を描く。文中の写真撮影の記事通り、婦人会の集合写真が、新発見の翌一月第四四号に掲載されている。そこで私たちは、露子をはじめ会員たちと二十人の子供達、それに宇田川文海、管野須賀子の姿を確認できる。当時管野須賀子は大坂婦人矯風会役員でもあり浪華婦人会の一員でもあった。もう一つ日露戦中に会が始めた和裁料理塾は浪華家政塾へと発展したが、戦争下では、軍人家族に和裁技術を無償で教授し、その製品を買い上げ塾生に便宜をはかった。露子はこの家政塾の卒業式で三回にわたって祝辞を朗読している。第三回卒業式では祝詞以外に「開き文 君がゆく道」（明治四十年四月第七一号）で卒業式には似つかわしくないと述べる。「人の母となるのみが婦人の天職にても候ふまじくや」「あくまで自己を忘れず奮進したまふべきに候ふ、自己は生命なり」と女性が家庭に入って自己を忘却することを戒めている。さながら青鞥グループや与謝野晶子の言説を先取りしたかのような言説である。その他の婦人会行事に関する記事は「売店室」（第四

七号)「園遊会」(第六六号)「かげろふ」(第七一号)にもみられる。露子は慈善事業

の本質を突く一方「あきらめ主義」(明治三十九年一月第六八号)では、慈善とは、取ったものを返す当然のことで誇るべきものでも何でもないと述べた。明治三十九年の東北三県の凶作の惨状を読者に訴え、義捐音楽会を露子自ら主宰し成功させた(明治三十九年三月二十一日)。そこでは親交のあった鈴木鼓村の箏曲の演奏や、当時「大阪朝日」の記者であった松崎天民の演奏があつたようだ。また、明治二十年代以来洋楽をリードしてきた大阪第四師団陸軍軍楽隊の演奏も見られ、充実した音楽会であつたと予想される。

このように、露子は、大阪市南区末吉橋通四丁目の浪華婦人会の事務局、そこから一二〇メートル程南の幼児保管所のあつた鉄眼寺、大阪市内の会員たち宅を訪れるなど、富田林から河南鉄道や関西鉄道の電車を使いあるいは俵で行き来しながら、慈善活動や雑誌の編集に精を出し、青春の一時を過ごした。彼女の浪華婦人会での活動は、彼女の文章や短歌の背景としてもっと焦点をあてられるべきであると思う。

